

音楽鑑賞教室の試み (小, 中学校以外)

吉永 誠吾・森 恭子・横山 洋子

Live Music Appreciation Concert
(except in Elementary and Junior High Schools)

Seigo YOSHINAGA, Kyoko MORI and Yoko YOKOYAMA

(Received November 14, 1997)

はじめに

筆者らは生演奏によって子供達に音楽の本当の美しさを感じてほしいとの願いから、音楽鑑賞教室を開催してきており、その概要についてはすでに報告したり、ところで音楽の効能が科学的にも証明されつつある昨今、筆者らのコンサート活動は各方面から依頼を受けつつあり、その数も少しずつではあるが増えつつある。これはクラシック音楽を多くの人々に好きになってもらいたいと願う筆者らにとって大変喜ばしいことである。その中でも特に印象に残っているものは、長期療養中の子供達のためのコンサートや、障害児とその保護者のために開いたコンサートである。障害児といえ、通常のコンサートを聴く機会など、一生涯を通じてまずないといっているであろう。従って、ただ一度のこの機会は、私たち音楽家の役割というものが大変大きなものであるということを強く認識させられたものであった。そこで本稿では既に報告した小、中学校以外の活動の概要について報告し、これからの課題についても考えたい。

I これまで行ってきた小、中学校以外のための音楽鑑賞教室

1 マタニティコンサート

胎児の聴覚機能は妊娠6~7カ月に完成すると言われている²⁾。従って、胎児に外の音が聞こえているであろうということは、今や常識である。そんなこともあり、吉永は熊本市内の、ある産婦人科医院からの依頼により、マタニティコンサートを行った。妊娠中の女性は、ともすれば精神的に不安定になりがちである。そこで、あまり激しく感動させるような曲はなるべく避け、美しいうえに、優しく穏やかな表情の曲を主として選び、演奏した。例えば、ヴ

ァイオリン独奏曲ではマスネー作曲「タイースの瞑想曲」、ドルドラ作曲「スーベニール」、バッハ作曲「G線上のアリア」などを演奏し、最後にサラサーテ作曲「チゴイネルワイゼン」のような華やかな曲で締めくくる。弦楽四重奏ではハイドン作曲「皇帝」第2楽章、「ひばり」、ドボルザーク作曲「アメリカ」第2楽章、チャイコフスキー作曲「アンダンテ カンタービレ」、ポロディン作曲「ノクターン」などである。場合によってはビートルズや映画音楽などもしゃれた編曲によって弦楽器で演奏すると、大変魅惑的な音楽になり、よい効果をもたらす。このマタニティコンサートでは次のような感想をいただいた。

- ・久しぶりに母親教室に参加し、ヴァイオリンなどの演奏を聴き、ゆったりした気持ちになれ、とてもよかった。
- ・とてもやさしい音楽、心なごませてくれる短いひととき、胎教音楽、毎回どんな曲を聴かせてもらえるのかとても楽しみにしています。(6回目)
- ・知らない曲ばかりでしたが、気持ちがゆったりしてとても安心できる曲ばかりでした。おなかの中で子供がうれしそうに動いていたみたいです。もっともっといろんな曲を聴いてみたいです。楽しみにしています。気持ちが安らぎ、精神的に落ち着いたような感じです。お産に対する不安で一杯で、毎日いらいらしていましたが、とてもおなかの赤ちゃんによかったと思います。
- ・とても静かで気持ちがやさしくなりました。
- ・生演奏はやはりいいですね。
- ・TV、ラジオとは違った音楽が聴け、お腹の赤ちゃんも喜んで聴いてくれたと思います。
- ・素晴らしい音楽を聴けて、とてもうれしく思いました。一緒に来た長女もヴァイオリンを見て、「私も習いたい」と言っていました。

このほかにもたくさんの感想を戴いたが、ほぼ同

じ内容であるので以下は省略する。これらの感想を要約すると次の三点にまとめることができる。

- ①出産への不安に対して精神的な安らぎとなる。
- ②お腹の中の赤ちゃんに対する母親らしい配慮（例えば、赤ちゃんも音楽を聴いて喜んでいる。）
- ③CDなどとは違った、生演奏としての感動がある。

以上である。この中でも③に関して言えば、筆者らのこれまでの活動とそれを支える理念に対し、力強い賛同として受け取ることが出来るであろう。

2 長期療養中の子供達のためのコンサート

筆者らのグループは長期療養中の子供達のためのコンサートも行っている。この子供達は重い病気のため長期にわたって入院を余儀なくされ、普通に学校に通うことが出来ないでいるのである。ここでは1994年7月15日、国立熊本病院で行ったコンサートの折、小児ガンの子供をもつ母親からの手紙を引用する。

「7月15日、当日は小児科の子供達、隣接の婦人科病棟の患者さんたちをお招きして（コンサートを）開いた。小児科の子供達は若年性リューマチ、肝臓病、血液疾患（血小板減少症、再生不良性貧血）、小児ガン（白血病、リンパ種など）など、小児特定疾患と言われる難病に冒されている。ほとんどが一年以上の入院生活をしている子供達で、入院退院を何度も繰り返している子供が多い。

病気が発症する前は、みんな元気な、子供らしい生活を各家庭で送っていたわけだが、病気で入院して以降、点滴治療、内服、痛い検査など、生きるために毎日、辛い治療を続けなければならない。治療をしなければ死んでしまう子供達がほとんどである。特に小児ガンの場合、以前より治療成績は良くなったものの、抗がん剤による治療は、効果もあるが副作用も著しい。今まで何人もの幼い子供達が亡くなっていった。

治療のため抵抗力が落ち、感染症に対しとても弱くなる。人からいろんな病気を感染させられる危険性があるため、クリーン室（隔離室）の二人又は一人部屋に入れられる。一番遊び回りたい時期に狭い部屋から出られないというのは、子供にとって苦痛そのものである。しかも、そこで数年の治療が行われる。

少しでも子供達の心が癒され、楽しみのある場を作ることができないかと、親として、ボランティアでコンサートや人形劇、うたなどに来て下さる方

はいないかといろいろと当たってみた。もちろん、予算など全くない。ただ、病気で日々必死に闘っている子供達がすてきな時間を持ち、感動を得てくれるならと、あつかましくもいろいろな人にコンサートなどをお願いしてみた。子供達も不定期に催されるコンサート、人形劇などを心待ちにしていた。

残念なのは、一番見せてあげたい白血病の子供達が、当日白血球がとても低く、部屋から出られないため、せっかくの会に参加できない場合が多いということだ。ナースステーションの看護婦さんも、「ずっと一緒に参加したいけど仕事が忙しくてごめんね。」でも、部屋のインターホンから聞こえるようにしておいて、ナースステーションで聴いとくからね」と言っておられた。いろいろな方々のご協力のお蔭でコンサートが開催できた。特に、小児科部長の高木医師が快く許可していただき、全医労の緒方さん、淀さん、看護部長さんも協力して下さった。

当日、子供達は、胸をワクワクさせながら参加した。吉永先生のバイオリン、森先生、横山先生の歌唱、ピアノ伴奏、病院の中で、しばらく時間が止まったような、とても心地よい時間が流れた。特に、聞き慣れた曲には婦人科の患者さんも一緒に口ずさんでおられ、涙を流しながら聴き入っておられた。演奏をしてくださっている先生方のお優しい気持ちと、演奏される曲の素晴らしさが聴くものの一人一人の心を打ち、熱いものが込み上げてきた。また、身じろぎもせず、じっと聞き入る子供達、日々苦しい治療に負けず、生きるための闘いを続ける子供達が、演奏される先生方を逆に勇気づけたに違いないと感じた。演奏された先生方と、聴き入る患者さんたちの気持ちが一体となって感動した。

互いに癒し、癒され合っている感じがした。「病気のことをしばし忘れ、本当に感動しました。ありがとうございます。」と、婦人科の患者さんからしっかりお礼を言われた。私も素敵な曲が忘れられず、同じ曲が入ったCDを、すぐ買いに走ったほどである。世の中には先生方のような優しい心をお持ちの方々がおられるんだなあと、あらためて感動し、こういう出会いが出来たことが嬉しくてならない。

会が終了し、先生方お手製のケーキをいただき、茶話会をした。子供達も参加し、とても心がなごんだ。

いつかこの子供達が、先生方のような、ボラン

ティアの心を学んで、若者になったとき、人の心を癒すような活動をしてくれたらと願わずにはいられない。私も長男に「あなたは色んな人から支えられて生かされているのよ。そのことを決して忘れてはいけないよ。大きくなってその御恩返しができるような人になってほしいなあ。」と言っている。「うん。分かっているよ。」と、もっぱら元気を取り戻した長男は、友達との遊びや部活に忙しく、たくましく成長してきた。やっとな、病気後5年経過し、「もう大丈夫だね。」と、主治医も喜ばれるようになった。

辛かった体験を越えてきた子供達は、本当の強さを持ち、ひたむきで、明るい。今も病気で苦しんでいる子供達、日々戦い続けている彼らを支援し、見守って行く仲間を作っていかなばと思う。」
福永真理子

3 障害者のための音楽鑑賞教室

筆者らは心身に障害のある人にも音楽を楽しむ機会を与えてほしいとの依頼があり、1995年9月1日に、八代市コスモ・エンジェルスタジオでコンサートを行った。これはそのときの障害者の人達の反応である。

・当時22歳 男 ダウン症のK君

小さいころより、もの静かな彼は、音楽に食い入るように、時には静かに目を閉じるようにして聞いていた。

・17歳 女 脳性麻痺のJちゃん

体格のいいJちゃんはうれしいらしく、立ったり座ったり、…お母さんはいすに座らせようと必死。コンサートが始まると、曲の中で一緒に歌うかのように大声を発していた。

・13歳 男 C君

小さなぬいぐるみを抱いてお父さんに連れられてきた彼はきちんとあいさつをした後で、ぬいぐるみを抱かせてくれた。小さいころより音楽が好きで、特に保育園時代の音楽会のテープは、今では擦り切れるほどなのに、まだ聞いているとのこと。コンサートが始まると、彼も元気よく歌ってくれて、椅子から立ち上がり、指揮をしてくれた。

・30歳 男 自閉症

普段は家にこもりがちな彼だが、音楽だけは好きで、いつもテープをイヤホンで聞いている。歌の練習もするほどで、特に歌謡曲が好き。そんな彼を父親は、よく色々なコンサートに連れ出す。色々な音楽を聴き、色々な人との触れ合いの機会を持つためにこの

日も母親と来てくれた。いつものように少し首をかしげながら、ただ黙って、じっと聴きいていた。でも、こころに何かが残ったようだ。帰るときの彼の顔に幸せそうな表情が見えた。

Jちゃんのお母さんの言葉の中に「今日はありがとうございました。こんなコンサートはJも初めてで、うれしかったようですが、何よりも一番うれしかったのは私です。一生この子にコンサートなんか縁がないと思っていました。」と涙ぐんでおられた。

II 音楽のもつ感動の力

1 松本サリン事件

松本サリン事件の第一通報者である河野義行氏の妻澄子さんは、オウム真理教信者がまいたサリンのために現在でも植物人間に近い状態が続いている。病院に運ばれたときに、一時心臓が停止し、その後回復したが、心停止がもとで脳細胞が破壊され、意識不明の状態が続いているのである。澄子さんは音楽がとてもし好きであったことから、河野氏は病室にラジカセを持ち込み、ヘッドホンで毎日、クラシック音楽などを聴かせている。そんな中で、乳癌を克服したピアニスト、遠藤郁子のコンサートに夫人を連れて出掛けた。そのコンサートの最中に夫人は音を探るように首を振るしぐさをした。昨年(平成8年)2月、澄子さんは療護施設の夜間当直員に聞こえるように「怖い」とか「痛い」とか言ったそうであるが、その後言葉は発していない。しかし、「おお」という声を発し、泣く機会も増えているそうである。音楽が澄子さんの破壊された脳を少しずつ回復させているのかもしれない⁹⁾。

2 ショーペンハウアーの音楽論

音楽はすべての芸術の中でも最も感動的であり、最も強力にその意志を聴衆に伝える。そのことをショーペンハウアーは実に見事に言い当てている。ショーペンハウアーはまず、「音楽はまことに偉大なまた並外れたすばらしい芸術であり、人間のいちばん奥深い所にきわめて力強く働きかけてくる。」と述べている。その根拠について彼は、

「人間の本质を考えてみると、人間の意志が努力し、満足させられ、あらためてまた努力し、という風に努力と満足とを無限にくりかえしていくことに人間の本质がある。のみならず人間が幸福で息災であるということの意味はただ、こうした願望から満足へ、満足からまた新しい願望へという

移り行きがとどこおりにくすみやかに前へ進んで行くということにすぎないのである。満足の得られない状態が、苦悩であり、新しい願望が湧かなくなってしまう状態が、空虚なあこがれ、もの憂さ、退屈である。こうみていくと旋律の本質もこれにぴったり照応しているのであって、旋律は基音（または根音）からたえまなくはずれ、逸脱したりしながら幾千という道をへて、第三音や属音といった和声音にいきつくだけでなく、いかなる音にも、それこそ不協和な第七度音にも増音程にもいきつくのであるが、それでもつねに最終的には基音（または根音）に立ちもどるところに旋律の本質がある。この今述べた幾千という道の途中で旋律が表現するのは、とりどりの形をした意志の努力のすがたなのであるが、しかし旋律がいちばん最後には、和声音を再発見したり、そのうえさらに基音までも再発見することで、やはりつねに表現するのはかの満足であるといえるのである。…略…願望から満足へ、そしてまた満足から新しい願望へととどこおりにくすみやかに移っていくことが幸福ならびに息災だと述べたが、してみると基音（または根音）から大きく逸れない速い旋律（たとえば進軍ラッパのメロディー）というものが楽しい旋律なのだ。苦しげな不協和音程に陥ったり、多くの小節をくぐりぬけ、紆余曲折を重ねてようやくもとの基音へゆつくりもどるような旋律（たとえばバッハの緩徐楽章）は、満足がなかなか得られない状態、満足を得るのが難しくなった状態にも類似して、悲しい旋律だといっていい。…略…大きな楽章の息の長い、基音から逸脱の幅が広い「威厳ヲモッテ快速ニ」Allegro maestoso は、遠い目標へと向かって大きく高貴な努力を重ねついにその目標に到達したありさまを表しているといっているのだ。…略…このことからわかるように音楽はあれこれの個々の、特定の喜びとか、あれこれの悲哀とか、苦痛とか、驚愕とか、歓喜とか、愉快さとか、心の安らぎとかを表現しているわけではけっしてない。音楽が表現しているものは喜びというもの、悲哀というもの、苦痛というもの、驚愕というもの、歓喜というもの、愉快というもの、心の安らぎというものそれ自体なのである。」

以上のように述べており、したがって「言葉とは理性の言語であり、音楽とは感情と情熱の言語だといってよいものなのである。」と述べている⁹⁾。音楽

がすべての芸術の中で最も大きな感動を与えるものであるということが、これによって実によく理解されるであろう。吉永はすでに島岡譲氏の理論に基づき、音楽の表現を和声進行と人間の感情の動きとのうえで関連づけて述べたが、ショーペンハウアーもすでに哲学者の立場からこれと同じことを述べていたのである。

3 音楽の持つ感動の力

長谷川千秋氏はその著『ベートーベン』の中に交響曲第九番が初演されたときの様子を次のように書き表している。

『いよいよ第九交響曲の番になった。オーケストラの前には、中央に指揮者が二人立った。…略…一人はつんぼのベートーベン。一人は、楽員がほとんどこれだけを頼りにしている平時指揮者のウムラウフ。ベートーベンの指揮は猛烈であった。彼はほとんど全部が彼には注意しないでウムラウフばかりに頼っている楽団にたいして、何を指揮しようとしたのだろう。彼の激しい身振りは気違いのようであった。ピアノシモになると、ひどく身をかがめ、譜面台の下にもぐって、ほとんど床につかばかりであった。そしてクレッシェンドがくると、だんだんと体を伸ばして、伸び上がり、次第に高くそり上がって、ついに、フォルティシモに達すると、彼は、腕をいっぱいひろげて、爆発するように、宙に飛び上がった。…略…彼は、演奏を終えたとき、後の熱狂には少しもきがつかず、まだ指揮棒を手にしたまま、寂然として立っていた。この時、アルトの独唱者が進み寄って、彼の手を取って、後を向けてやった。彼は、初めて、聴衆の嵐がわかった⁵⁾。』

この交響曲の第四楽章で合唱団とオーケストラが一斉に「vor Gott!」と叫ぶのを初めて客席で聴いたとき、あるいは合唱団に加わって初めて歌ったとき、あるいはオーケストラで演奏したとき、もしかしたら初めて指揮したとき、はたしてどんな気持ちであったろうか。だれしもが全身が鳥肌で覆われるような感動に包まれたに違いないであろう。我が国で年末になると全国各地でこの曲が演奏されるのは、そのような感動をもう一度体験したいという願いを多くの人が持っているからにはほかならない。

人間は健常者であれ障害者であれ、地球上に一度しかない生命を与えられたという点では平等である。

したがってもちろん生きる喜びを感じることや、それを表現したいと思う気持ちの強さも同じであろう。さらに感動を求める気持ちも同じはずである。障害者が普通のコンサートに参加することはもちろん無理がある。しかしそれなりに工夫して障害者が音楽に親しむ機会をもっともっと多く増やすべきであろう。

注

1) 吉永誠吾・森 恭子・横山洋子著、『音楽鑑賞教室の試

み』、熊本大学教育実践研究、第14号、1997年2月、p.63-66

2) 志村洋子著、『赤ちゃん語がわかりますか』、丸善メイツ(株)、1989年6月、p.34

3) 平成9年2月6日(木)、東京新聞

4) ショーペンハウアー著、西尾幹二訳および責任編集、『意志と表象としての世界～世界の名著(続)10～』、中央公論社、昭和62年3月、p.482-485

5) 長谷川千秋著、『ベートーヴェン』、岩波新書、1964年3月、p.132-133